

昔むかし、あるところにひとりの騎士^{きし}がいて、ハンスという息子^{むすこ}がいました。ハンスは、笛^{ふえ}を吹いたりチターをひいたりするのが、すばらしくじょうずでした。

ある日のこと、ハンスは、公爵^{こうしやく}のお姫さま^{ひめ}のうわさを聞きました。お姫さまは、とても美しくて、結婚^{けっこん}したいと思っているのに、ふさわしい人がいっこうにあらわれないということでした。そこで、ハンスは、お姫さまに手紙を書いて送り^{おく}ました。

「わたしこそがあなたにふさわしい男です」

しばらくして、ハンスはお姫さまから返事^{へんじ}の手紙をもらいました。返事にはこう書いてありました。

「手紙を読んだだけで、あなたがうすのろだということがわかりました。わたしの夫になることなどできません」

ハンスは、腹^{はら}をたてました。そして、高慢^{こうまん}ちきなお姫さまの鼻^{はな}つ柱^{ばしら}をへしおって、仕返し^{かえ}をしてやろうと思いました。

ハンスは、親^{おや}たちに、旅^{たび}に出て世の中を見たいといって、家を出ました。笛とチターとわずかなお金を持って行きました。

公爵^{しやく}のお城^{しろ}に着くと、ハンスは、

「羊飼^{ひつじか}いとしてやとつてくれませんか」とたのみました。すると、召使^{めしつか}いのかしら

「ちようどいいところに来てくれた。きのう、羊飼^{ひつじか}いをひとり追^おい出したところなんだ。

今までいた羊飼^{やぐた}いは役立^{やくた}たずばかりで、どいつもこいつも、しょっちゅう羊をなくすんだよ。しかも、羊がいなくなった晩^{ばん}は、きまつて、公爵^{こうしやく}さまの頭^{いた}が痛^{いた}くなるんだ」といいました。そこで、ハンスは、羊飼^{ひつじか}いとして働^{はたら}くことになりました。

公爵^{こうしやく}は三百頭の羊を飼^かっていました。毎日、気味^{きみ}の悪い細^{わろ}い谷を通つて、羊たちを深い森^おに追^おつて行き、一頭残らず連^つれて帰らなくてはなりませんでした。

はじめの一週間、ハンスは、一頭の羊もなくさないで働きました。

二週間目になると、ハンスは退屈^{たいくつ}になつて、あたりを歩きまわりました。すると、森の丘^{おか}の上にくずれたお城^{しろ}がありました。そして、くずれた門のそばに羊を見張^{みは}るのにおあつらえ向きの石を見つけました。ハンスは、その石にすわつて、笛を取り出し、羊たちに吹いて聞かせました。

それからいくらもたたないうちに、門の中から、こっそり、ひとりのこびとが出て来ました。こびとは、赤い服を着て、長い白いひげをのばしていました。そして、ひっそりとハンスの笛の音に聞き入りました。ハンスはこびとに気づきませんでした。

また一週間が過ぎたある日、ハンスはふと振り返って赤いこびとを見つけました。ハンスは、こびとを恐れることなく、ゆうゆうと笛を吹きつけました。やがて、ふたりは、笛のことや羊のことをあれこれおしゃべりするようになりました。

お城の人たちは、ハンスが一頭の羊もなくさないのをふしぎに思いました。公爵の頭の痛みも消え、ぐっすり眠れるようになりました。この話が、お姫さまの耳に入りました。

ある日、お姫さまは、ふしぎな羊飼いの顔を見ようと、ハンスの小屋にやって来ました。すると、小屋の中からチターの美しい音が聞こえました。鳥たちが鳴くのをやめてチターの音色に聞きほれていました。お姫さまは、

「こんなすばらしい音楽をひける人が、いったいどうしてただの羊飼いなのだろう」と思いました。

お姫さまは、毎日ハンスの小屋の窓の外で、チターを聴きました。そして、そのうち、小屋の中で、ハンスとおしゃべりしたり、チターを聴いたりして楽しく過ごすようになりました。ハンスは、お姫さまにばかにされた仕返しをしようと考えて、このお城にやってきたのに、今では、お姫さまを愛するようになっていました。

やがて、お姫さまのお腹に赤ん坊ができました。公爵はおどろいて、赤ん坊の父親はだれかとたずねましたが、お姫さまは答えようとしませんでした。すると、年とった司祭が、公爵にいいました。

「これは、神さまにお聞きなさいませ。国じゅうの男たちを集めて一騎打ちをさせるのです。神さまは、赤ん坊の父親が勝つように仕向けてくださいましょう」

国じゅうから、男たちが集まってきました。

お姫さまは、ハンスのところに行っていました。

「あなたが羊飼いなのが残念ではありません。だって、あなたは、一騎打ちなどとてもできないでしょう。わたしたちは、別れるよりほかありません。どうぞ、思い出に、これを持っていてください」

お姫さまは、そういって、ハンスに冠と自分の名前を刺しゅうしたハンカチをわたしま

した。

つぎの朝、ハンスが羊を追って森に行くと、くずれたお城の代わり^かに、りっぱなお城がたっていました。ハンスがあっけにとられていると、りっぱな門から赤いこびとが出て来て、手招^{てまね}きました。ハンスがお城に入っていくと、大広間^{おおひろま}にやりや刀^{かたな}やよろいかぶとがいっぱいかかっていました。こびとは、

「さあ、おまえに合うものを取れ。おまえの最愛^{さいあい}の人を手にいれるんだ。おまえはいつも、わしによくしてくれた。これからは、すべてうまくいくぞ」といいました。

馬屋^{うまや}には、たくさん^{うまや}の馬がいましたが、その中の、栗毛^{くりげ}とあおと白馬の三頭にはくらが置^おかれていました。

「おまえは、三日たたかなければならないだろう。毎日新しい馬を使うといい」

ハンスは、よろいかぶとに身をかためて、栗毛の馬に乗って会場に向かいました。会場ではもう一騎打ちが始まっていました。ハンスはだれよりも強く、勝ち続け^{つづ}ましたが、戦^おいが終わると、ひらりとさくを飛び越^こえて森へ帰って行きました。そして、羊飼^おいにもどって羊を連れてお城に帰りました。

あくる日は、ハンスは、あおにまたがって戦いました。そして、最後にさくを飛び越えて帰ったので、それがだれだか、だれにもわかりませんでした。

三日目、ハンスは、金のよろいかぶとに身をかためて、白馬に乗って戦いました。かぶとには、お姫さまにもったかんむりをつけていました。今度もハンスが勝ち残り^{のこ}ましたが、最後に、ふくらはぎをやりで突^つかれてしまいました。ハンスは、さくを飛び越えて森へ帰り、足を引きずりながらお城にもどりました。

ハンスは、お姫さまにもったハンカチで傷^{きず}をしばりました。

つぎの日、ハンスは、羊を追って森へ行くことができませんでした。すると、お城の人たちが心配して、お医者^{いしや}を呼^よんで来^きました。お医者^{いしや}は、お姫さまの名前の書いてあるハンカチを見て、そのことを公爵^{ほうく}に報告^{ほうこく}しました。公爵は、ハンスを呼び出しました。

ハンスは、自分が騎士の息子で、お姫さまを仕返^{たす}しするためにやってきたこと、今ではお姫さまを愛していること、赤いこびとに助^{たす}けられて、一騎打ちに勝つことができたことなどを話しました。公爵はいいました。

「それなら、おまえがまぎれもなく、わしの娘^{おつと}の夫^{おつと}だ。さあ、結婚^{けつこん}式^{しき}をあげてくれ」

そのとたん、バリバリッと、世界^{せかい}じゅうがこわれるような音がしました。そして、お

城のとびらが開いてりっぱな王さまが入って来ました。王さまはいいました。

「わたしは、公爵の父親がわたしの娘に結婚を申しこんだとき、公爵を笑いものにしてことわった。すると、公爵の父親は、わたしの城に呪いのかけ、わたしをこびとに変えてしまったのだ。羊飼いが公爵の娘と結婚しないかぎり、呪いが解けないことになった。今、このハンスが呪いを解いてくれたのだ」

ハンスは、公爵の娘と結婚し、王さまのあとをついで、いつまでもしあわせに暮らしました。

村上郁再話

資料『世界の民話28 オーストリア』飯豊道夫訳／ぎょうせい